『児童生徒の足』実態調査へ

(財)日本学校保健会「足の健康に関する調査研究委員会」

慶應義塾大学総合医科学研究センター整形外科教授（日本靴医学会理事長）　井口　傑　委員

足囲やアーチも三次元的に計測

運動・遊びとの関連も探る

1200人以上対象にデータ収集

学校現場と医学分野の橋渡しに

(財)日本学校保健会の「足の健康に関する調査研究委員会」（委員長＝江口篤壽・筑波大学名誉教授）は、日本教育シューズ協議会（JES）の協力を得て、三次元計測器を用いた「児童生徒の足に関する実態調査」の準備を進めている。

委員の井口傑・慶應義塾大学教授（日本靴医学会理事長）によると、今年8月24、25日には実際に計測に携わるボランティアの計測委員講習会もすでに終了。その後、レントゲン結果と比較した同計測器の精度の検証を行っており今後3年間くらいかけてデータを収集するという。

「本調査の対象は、小・中・高校の児童生徒。最少でも1200人のデータ収集が目標です。最大の特徴は足長、足幅だけでなく、足囲やアーチと呼ばれる舟状骨の高さも三次元的に計測する点。これらを実際に計測したデータは、これまでにはありません」

さらに、運動や遊びがどのように足と関連しているかなどを調査する。同時に靴を1年に何回取り換えるかといった靴に関する使用状況などもアンケートで調査する予定だ。

「計測委員の講習会には、JES会員などの約30人が参加。足置きテスターとコンピューターを併用した三次元計測器を用いた日本脳神経外科学会総会で同症が研究テーマとして取り上げられ、病気の存在の有無を含め、診断や治療のガイドラインづくりも視野に入れた議論を展開するなど大きく動き出したという。

さらに11月には脳脊髄液減少症を発症した患者家族等が文科省を訪れ、池坊保子副文科相に症状に苦しむ児童生徒の状況や、学校現場の対応を求める1万余名の署名を提出した。

このような現状を勘案し、文科省では脳脊髄液減少症について教師に知ってもらうことが重要であるとし、学校の事故等で必要に応じて医療機関で適切な治療を受けることなどを学校に周知していく方針を固めた。

同省スポーツ・青少年局学校健康教育課によると、近日中に教育関係者などが集まる会議あるいは通知により周知を図っていくこととしている。

髄液漏れ（脳脊髄液減少症）

学校現場に周知図る

スポーツ外傷や転倒でも発症

適切な治療促す

交通事故やスポーツ、転倒などをきっかけに発症するとされる脳脊髄液減少症（髄液漏れ）について、文部科学省では学校現場に広く周知していく方針をこのほど固めた。

文部科学省方針

脳脊髄液減少症は、現時点では関係学会においてその存在も含め検討中ではあるが、体内で脳と脊髄の周囲を覆っている脳脊髄液（髄液）が減少し、脳神経が失調をきたして頭痛や首の痛み、めまい、立ちくらみ、視力・聴力低下、手足のしびれといった症状が長期間続く病気であるとの報告がなされている。多くが交通事故などによるケガに起因するとされるが、スポーツによる外傷などでも発症するとの報告もある。

また、潜在患者は相当数いると考えられているものの治療に取り組む医療機関が少ないのが現状だったが、10月に京都で開催され

ヤマハスポーツ文化フォーラム

ヤマハスポーツ文化フォーラム2007が2月9日、東京都千代田区の九段会館、2月16日、大阪市のテイジンホールでそれぞれ開かれる。

プール事業30年を迎えたヤマハ発動機㈱がプールの可能性を広く訴えるために99年から全国各地で開催しているもの。

今回のテーマは「われらは海の子―水泳でたくましい人づくり」。少子化や子どもたちの体力低下が叫ばれる現代にあって、子どもの成長に不可欠な運動として水泳を再検証する。

パネルディスカッション「われらは海の子―水泳でたくましい人づくり」と「安全なプール環境を目指して」をテーマとする講演の2部構成で行われる。

問い合わせはヤマハ発動機㈱スポーツ文化フォーラム事務局、森田氏☎053・594・6512。

大阪大学出版会

大阪大学新世紀レクチャー

著者インタビュー

眼の良い子は、